



# 幻の青い皿

江戸後期志田窯  
染付皿展図録



横芝光町教育委員会

## はじめに

正直言って、志田焼は知らなかった。齋藤氏から志田焼を収集しているが、それを展示してみないかと話を受けたとき、それがどのような陶磁器であるか、私の知識の中にはなかった。早々調べた結果、江戸時代後期、有田大外山に在った旧塩田町志田で焼かれた染付磁器であることを知った。この志田焼、考古学的にはほとんど消費地遺跡からの出土はなく、平成元年、志田で窯跡が発掘調査されるまで、その存在すら忘れさられ、取り上げられることはまずなかった。また、骨董的にはかつて江波焼と言われ、その価値は古伊万里や鍋島・柿右衛門とは数段も格下に見られ、ほとんど出回らなかった。それが「幻の志田焼」といわれる所以である。その志田焼は庶民向けに量産され、その多くが伝世し、今日も使われている。テレビでも注意して見ていると、料理や旅番組で何気なく登場するのに気づく。

そうした志田焼も、近年、他の陶磁器とは異なって、手描き染付で山水や動植物、人物などの主文に、輪花の皿が多いことなど、その面白さが見直され、人気が高まっているという。そういう中で、多数の志田焼を収集した齋藤氏の目は卓見であり、今回、紹介できることは望外の喜びである。

この志田焼、判明してまだ四半世紀が過ぎただけで、まだまだ埋もれている作品もあると思うし、まだ知られていない窯の陶磁器もあるだろう。それだけ日本の陶磁器の歴史は、1万年という歴史の重みと深さがあり、日本人の感性の豊かさに裏付けられた文化の多様性がある。

今回の志田焼の染付磁器を鑑賞して、我々日本人の心情を映し見ていただければ幸いです。

町民ギャラリー担当

道澤 明

## 御挨拶

いつの頃からか、その素朴な美しさに惹かれ、陶磁器を収集することが趣味となりました。もとより専門知識はありませんでしたので、自分自身が感覚的に美しいと感じるものを集めることとしていました。

今回提供させていただいた作品は、かつては、江波焼と呼ばれ、現在の広島中区江波二本松付近の窯で焼成されたとされていたものですが、後の研究により、伊万里（現在の佐賀県嬉野市で焼成された志田焼）であることが判明したものです。当時、私は、江波焼と呼ばれた陶磁器に、伊万里と同様の美しさを感じ、収集に励んでいたものです。陶磁器の美しさは、それがどのように分類されようが、手に取るものを魅了します。

今回の作品群には、すべて、吉祥文様（縁起が良いとされる動植物等の図柄）が描かれており、その構図は、ユーモアの中に時代の息吹を感じさせます。陶磁器は時代を映す鏡です。当時の民衆の息遣いを感じとっていただければ幸いです。

平成27年6月吉日

齋藤 順一

## 目次

はじめに

御挨拶

目次

|                   |       |      |
|-------------------|-------|------|
| 1. 志田窯とその周辺       | ----- | 1    |
| 2. 展示志田窯製品の概要     | ----- | 2    |
| 3. 志田窯製品の絵付図柄について | ----- | 3    |
| 4. 展示品解説          | ----- | 4～38 |

参考文献

## 例言

1. 本書は平成27年6月6日から7月20日まで、横芝光町立図書館2階超民ギャラリーで開催の企画展「幻の青い皿ー江戸後期志田窯の染付皿展」の図録である。
2. 展示の志田窯染付皿は、町内在住の齋藤順一氏が長年の収集で所蔵され、同氏のご好意により、まとめて借用し展示することができた。ここに記して感謝します。
3. 本図録を制作、執筆する上で、齋藤順一氏から資料の提供、及び、ご助言、ご教授を賜りました。重ねて御礼申し上げます。
4. 本図録の執筆、編集は横芝光町教育委員会社会文化課生涯学習班町民ギャラリー担当の道澤が当たった。なお、一部参考として、インターネットから検索して得た画像資料を引用した。



志田陶磁器株式会社跡に開設した志田焼の里博物館

## 1. 志田窯とその周辺

この度紹介する志田窯製品は、もとは広島江波焼と称されていたが、全国的な流通量が多いため疑問がもたれていた。平成元年頃、佐賀県の塩田町で地元歴史民俗資料館と九州陶磁文化館との発掘調査によって、出土磁片と伝世品との一致が見られ、志田窯製品である事が明らかとなった。

志田窯は、佐賀県有田の東17kmほどの所にあり、江戸後期の有田を中心とした肥前磁器産地の一窯であった。志田では江戸中期のも一時期操業したとされるが、本格的に磁器の生産をしたのは19世紀に入ってからで、明治期を経て、昭和の終わり頃まで操業していた。江戸後期には志田窯は、その土地の支配藩のよって東山と西山とに分かれ、それぞれ個別に操業し、その製品の交流は表向きなかったはずであるが、両者は裏では繋がって似たような製品を作っていたため、東山と西山との製品の違いを見分ける事は難しいと言われる。また、志田窯製皿がいつからどのような経緯で、江波焼と称されるようになったかは不明である。考古学的には江戸後期から幕末にかけての遺跡からは、志田窯製品と思われる遺物の出土は少なく、肥前磁器の研究にあまり取り上げられる事はなかった。おそらく志田皿の多くが伝世し、今日も普段使いとして一般家庭に埋もれているのであろう。

志田窯が含まれる肥前には、江戸初期から有田を中心とする大きな陶磁器産地が形成され、積出港の名を取って伊万里のブランドで、国内はもとより海外にも輸出され、世界的にも知られた。その中には高級な鍋島・柿右衛門様式から、庶民用の波佐見焼など様々であり、それぞれの需要を満たしていた。その中で江戸後期の志田焼は染付皿のみの、高級品と庶民用との中間的な製品を作り、文化・文政期の社会的な需要に添って発展したものと思われる。しかし、明治以降の社会変化と規制の解除によって、染付皿の需要が減ると急速に衰退して行ったらしい。



肥前主要窯跡分布図

## 2. 展示志田窯製品の概要

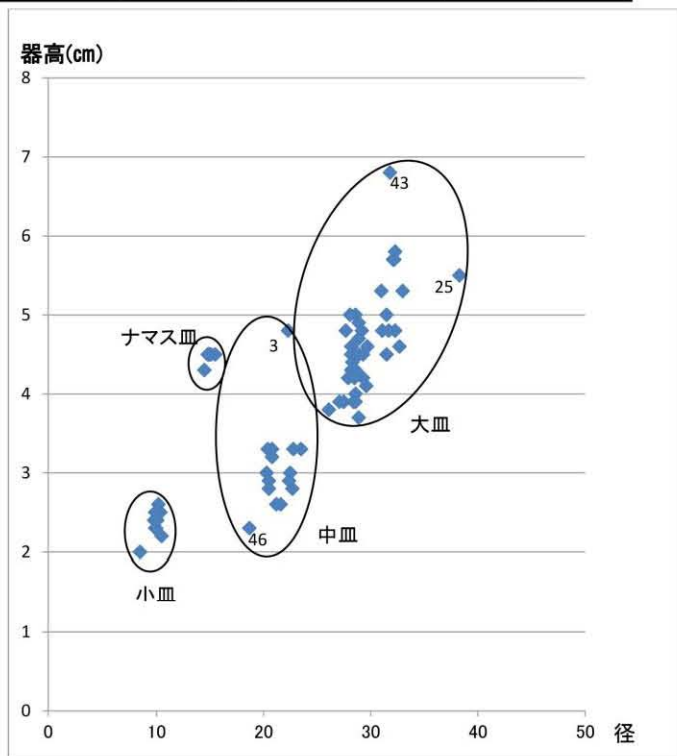
志田窯製品の特徴は、ほぼ皿のみの生産で、縁は波形の輪花が多く、絵柄は山水文の他、動物・人物・草花を題材とした手描きの染付を主体とする。輪花縁には帯状文を付けているのが多く、平縁では雷文を施しているものもある。大きさでは径30cm前後の大皿（いわゆる尺皿）、径20cm前後の中皿（7寸皿）、径10cm前後の小皿（3寸皿）、径15cm前後のなます皿の、大きく4種類に分けられる。そのようなところから今回展示する72点全ては、志田窯製品と見ていいと考えられる。その72点を属性ごとに分類したのが、下の表である。また、

志田窯品分類表

|     | 大・中皿(カッコ内は中皿) |      |      |      |      |        | なます皿 | 小皿 | 合計 |
|-----|---------------|------|------|------|------|--------|------|----|----|
|     | 帯状文輪花         | 無文輪花 | 雷文平縁 | 無文平縁 | 口紅平縁 | 計      |      |    |    |
| 山水文 | 13(7)         | 6(1) | 5    | 4    | 4    | 32(8)  | 5    | 11 | 48 |
| 動物文 | 8(4)          | 1    | 1    | 2    | 0    | 12(4)  | 1    | 0  | 13 |
| 植物文 | 4(2)          | 1    | 1(1) | 0    | 0    | 6(3)   | 0    | 1  | 7  |
| 人物文 | 1             | 1    | 0    | 0    | 1    | 3      | 0    | 1  | 4  |
| 計   | 26(13)        | 9(1) | 7(1) | 6    | 5    | 53(15) | 6    | 13 | 72 |

径と器高との属性をグラフ化したのが、右の図である。

表を見る様に展示品で最も多いのが32点の山水文で、うち帯状文輪花の皿が13点、他の縁意匠の皿は4～5点で、これは他の主文と傾向は変わらない。また、一つの傾向としては、雷文縁の皿は裏面に唐草文が必ずあり、唐草文のある輪花皿は1点のみである。それに対し、輪花皿には三方笹文を施したのが2点ある。それ以外の輪花皿は裏面が無文であるのが特徴である。縁に口紅を付けた皿は5点あり、いずれも平縁である。なます皿は山水文の5枚組があり、小皿では同じ山水文の7枚組があり、いずれも輪花である。



展示志田窯皿の法量分布

次に右のグラフで、径と器高の法量分布を見ると、大皿、中皿、なます皿、小皿の4種が見事に分けられる。しかし、大皿と中皿では分布が広がっていて、画一的でない事から、これらの製品が量産品でありながらも型作りではなく、1点1点轆轤引き作りしていたと思われる。それに対し、なます皿と小皿の組み物は、分布が集中し、器体も波打っている事から、型作りであると思われる。

このほか小林ほか(1994)によれば、志田窯製品は素地が白くないため、白化粧をしていると言われるが、展示品を見る限り、一部に白化粧の斑が認められるぐらいで、概してきれいな仕上がりとなっているものが多い。

### 3. 志田窯製品の絵付け図柄について

志田窯で江戸後期に作られた器は、ほぼ皿のみであった。そしてそれに施された絵付けも、一部に色絵がある以外は、ほぼ呉須かコバルトによる染付に限られていた。その図柄は山水文、動物文、植物文、人物文など、それ以前から有田染付磁器に使われていた図柄を踏襲しつつも、皿というキャンパスを最大限に活用し、手描きで大描きしたものを特徴とするのが他と異なる。その志田窯製品の特徴である絵付図柄について、少しふれてみたい。

今回展示する志田窯製品の皿で最も多い図柄は山水文で、絵の下半分に海が占め、上部に遠山、中央部に島のような陸と家屋・東屋・楼閣、その周りに樹木、岩礁などを配した構図となっている。その山水図の元となったと思われる水墨画を探すと、下のような作品が見られる。また、山水図の変形として、富士に松・家屋文・鶴などの図柄があり、手本となる水墨画がないものもある。動物文では龍や唐獅子は定型の手本があるが、兎・鷺・鼠など身近な動物は見られない。植物でも菊・秋海棠・水仙なども、手本が見当たらない。人物文では竹林人物文は中国の故事「寒山拾得」で、水墨画の題材として使われている。この様に志田窯製品の皿図柄は、染付という単色絵付である事から、元は水墨画を手本として、それをアレンジ、あるいは独自に描いた図柄を描いて行ったものと思われる。またそこには市場での要求・需要、あるいは注文もあったかもしれない。また、それに応える事ができたのは、手描きという手間ではあるが、柔軟な工程が支えたからであろう。

もう一つ志田窯製品の特徴として、帯状文と氷裂文を多く使われた事である。帯状文は縁が少し反る輪花皿に、氷裂文は貫入の様に表現している。このほか展示品を見る限りでは、雷文のある皿には必ず裏面に唐草文を施している。このような器形と施文との組み合わせで、少しずつ差が見られるのは、窯の違いか時期差なのかは現段階では分からない。

しかし、志田窯製品がこの様に多様でありながらも、ある特徴を有しているところから、一つの様式を有していると言える。



小栗宗継筆 山水図



3 渡辺包夫筆 初期狩野派山水図模写



啓書記筆 水墨月雁雪四季山水図

## 4. 展示品解説



### 1. 山水文皿

径32.1cm 器高5.7cm 器厚0.6cm

収集品の中で主文に山水文を描いた大・中皿は、72点中32点に及び、半分近くに達し、志田窯製品の中核を成している図案であろう。その山水文も少しずつ絵柄は異なるが、遠くに高山を、手前に家屋を配し、その間に海や樹木を挟んでいる構図となるのが基本である。1番の本品は中でも図柄が丁寧に描かれ、縁の2重带状文と相まって、初期作品のいい出来のものである。







## 2. 山水文皿

径32.7cm 器高4.6cm 器厚0.6cm

縁が少し反り、弱い輪花に、二重帯状文を付し、縁の呉須が裏側にも垂れている。山水文は富士のような高山を背景に、呉須の濃淡をうまく使って、水墨画の様に描いている。表面中央部には轆轤削りの筋が、よく見える。高台畳付に少し引っ付きが残る。





### 3. 山水文皿

径28.6cm 器高4.0cm 器厚0.53cm

色が鮮やかである事から、コバルトを使った絵付けである。縁は反って先が上に向く、弱い輪花である。二重帯状文に、険しい山を背景に、絵具の濃淡で丁寧であるが、少し簡略化させた山水が描かれている。

高台畳付はきれいに仕上げている。





4. 白富士山水文皿  
 径28.6cm 器高5.0cm  
 器厚0.7cm

少し反って弱い輪花に、  
 带状文を付けた、やや深め  
 の皿である。絵柄は海のむ  
 こうに白富士を描き、手前  
 に家屋と樹木のある陸地を  
 配し、下の点は磯の岩礁を  
 表したものか。絵付けは少  
 しにじみ、全体に青みを帯  
 び、釉に貫入が入る。裏面  
 に珍しく目跡がない。



5. 白富士山水文皿  
 径29.6cm 器高4.1cm  
 器厚0.7cm

4と同じ構図の絵柄であ  
 るが、こちらには家屋の後  
 に煙突らしきものがある。  
 带状文もこちらの方が丁寧  
 に描かれ、こちらが先行作  
 かもしれない。高台はV字  
 に削られ、砂が少し付く。





6. 山水文皿  
 径29.3cm 器高4.5cm  
 器厚0.63cm

縁が反り、帯状文を施した山水文皿で、主文は遠山の下に大きく岩を配し、滝が描かれているのが他と異なる。絵付は全体的にぼやけた感じである。



7. 山水文中皿  
 径22.5cm 器高3.0cm 器厚0.55cm

縁が反り、帯状文を広めに描き、主文を面全体に細かく丁寧に描かれた中皿である。裏面の仕上げもきれいで、目跡は真ん中にある。





8. 山水文中皿

径23.5cm 器高3.3cm 器厚0.7cm

縁が反り、帯状文を施した中皿で、主文は遠山に、海上の島に家屋と楼郭、そびえる岩峰を、左にはたなびく雲を表したもののか。



9. 山水文中皿

径20.8cm 器高3.3cm

器厚0.44cm

広い帯状文に、簡略化された山水文に東屋、雁を描いている。絵付は全体ににじんだ感じである。



10. 山水文中皿

径18.7cm 器高2.3cm 器厚0.75cm

細い帯状文に、簡略化した山水文を描いている。絵付は薄めで鮮やかである事から、コバルトを使っているのであろう。





### 11. 山水文中皿

径20.8cm 器高3.2cm 器厚0.62cm

縁が反り、弱い輪花で、帯状文を施し、遠山さん水文を描いた中皿である。山水文は簡略化だけでなく、かなり崩れた図柄になっていて、何を描こうとしているのか、分からなくなっている。高台に砂が付く。



### 12. 山水文中皿

径20.3cm 器高3.0cm 器厚0.67cm

11と全く同じ絵柄の中皿である。こちらには釉に貫入が入っている。高台に少し砂が付く。



### 13. 樹下月食文中皿

径22.7cm 器高2.8cm 器厚0.52cm

縁が反り、弱い輪花で、帯状文を施した中皿である。絵柄は右に松の樹を1本描き、上に雲、下に海、そして松の樹を横切って雲のような帯を入れた不思議な構図である。さらに左の丸いものは、月食の月であると言う。出来はきれいである。





14. 山水日の出文皿

径29.7cm 器高4.6cm 器厚0.65cm

縁が波打つ輪花で、丸く立ち上がって少し反る皿である。見込み部分に夫婦岩と日の出の図柄を描き、その周囲に同じ山水図を3方に配した変わった構図となっている。裏面には三方笠模様を入れ、高台近くに圏線が1本入る。高台に少し砂が付く。





15. 山水文皿  
 径33.0cm 器高5.3cm  
 器厚0.55cm

縁を型押ししか、篋当てで輪花にした皿で、縁は内湾する。主文は内面全体に山水文を描いている。絵付は明瞭にかつ丁寧に描かれている。裏底に目跡が8箇所あるが、底が落ちて、高台より出ている。



16. 山水文皿  
 径28.1cm 器高5.0cm  
 器厚0.56cm

縁を型押ししか篋当てして輪花にした皿で、縁は内湾する。主文は15と同じであるが、だいぶ単純化され、絵付がにじんだ様になっている。目跡は少し大きめで目立つ。







17. 山水文皿  
径27.5cm 器高3.9cm  
器厚0.75cm

型押し篋当てで輪花にし、  
簡略化した山水文を絵付した  
皿である。裏面に化粧土を刷  
毛塗りした、斑痕が見える。



18. 山水文皿  
径28.2cm 器高4.5cm  
器厚0.7cm

17と同じ形態、図柄の皿であ  
るが、こちら図柄はさらに簡略  
化し、遠山の背後に日の出が付  
け足されている。





19. 山水文皿  
径28.2 cm 器高4.3cm  
器厚0.58cm

平縁の皿で、この皿も17と同じ構図の図柄であるが、こちらの方が丁寧な描き方である。全体に青みがかかり、きれいな作りであるが、高台には砂が付く。



20. 山水文皿  
径28.6cm 器高4.3cm  
器厚0.45cm

平縁に口紅を付けた皿で、絵付の構図は19と似るが、より簡略化され、染付色は鮮やかで濃く、コバルトと思われる。高台に砂が付く。





21. 氷裂渦卷三分山水文皿  
 径38.3cm 器高5.5cm 器厚0.85cm

今回展示品中最大の皿で、平縁に氷裂文が放射状に三方に広がり、山水文を上重ねて分割している。氷裂文の上には馬の目状の渦巻きが描かれ、図柄のアクセントとなっている。絵付けの描画は明瞭で、丁寧に描かれている。裏面には簡略唐草文が描かれ、高台内側にも圈線が入る。





## 22. 氷裂山水文皿

径31.0cm 器高5.3cm 器厚0.81cm

平縁に口紅を付けた皿で、主文に少し右に寄せた扇形に窓枠した中に、山水文を描き、窓枠の外側に氷裂文を施している。氷裂文の上には梅花を描いている。全体にきれいな仕上げであるが、釉に大きめの貫入が入る。





23. 富士松帆掛船文皿  
 径28.3cm 器高4.4cm  
 器厚0.52cm

平縁の皿で、主文に富士を海の彼方の背景に、手前に丘の上に生える松を描いた絵柄で、志田窯製品のひとつパターン化されたものである。この皿は色が鮮やかで、コバルトを使っていると思われる。



24. 富士松帆掛船文皿  
 径28.9cm 器高3.7cm  
 器厚0.52cm

平縁に口紅を付けた皿で、主文は23と同じである。こちらは全体に灰色がかり、絵付も黒みを帯び、鉄分の多い呉須を使ったのであろう。





25. 白富士松帆掛船文皿  
 径31.5cm 器高5.0cm  
 器厚0.52cm

平縁に口紅を付けた皿で、  
 主文は背景の白富士を大きく  
 デフォルメし、手前の丘と松  
 は単純化して描いている。裏  
 面には三方笹模様を入れてい  
 る。高台内にも圈線を入れ、  
 目跡が目立つ。



26. 白山文中皿  
 径22.8cm 器高3.3cm 器厚0.55cm

型押しで輪花にした中皿で、主  
 文は白山に松を単純化して描いて  
 いる。裏面の三方笹模様も単純化  
 され、図の題材が何であるか分か  
 りにくくなってきている。





27. 山水文皿  
 径32.2cm 器高5.7cm  
 器厚0.55cm

少し縁が反る平縁に、太い圏線を入れ、主文は16と同じ構図の山水図を描いているが、だいぶ単純化された絵柄である。絵付けも少しぼけていて、あまりいい方ではない。



28. 山水文皿  
 径29.3cm 器高4.2cm  
 器厚0.63cm

平縁の縁に、雷文を施し、主文は岩礁が中央に来る絵柄が、他とは異なる。裏面には簡略唐草文が施される。全体に細かい貫入が入る。





### 29. 山水文皿

径27.7cm 器高4.8cm

器厚0.6cm

平縁の縁に雷文を施し、主文に山水図を描き、裏面に簡略唐草文を入れた皿である。色が濃く、鮮やかである事から、染付にコバルトを使用していると思われる。高台内の目跡は、目立たないが4箇所ある。



### 30. 山水文皿

径28.4cm 器高3.9cm

器厚0.6cm

これも平縁の縁に雷文を施し、29に似た山水文を描いている。しかし、こちらは遠山が角張り、手前の家屋が無くなり、紅葉のような木が足されている。この染付もコバルトであろう。







31. 山水文皿  
 径28.6cm 器高3.9cm  
 器厚0.52cm

平縁の縁に雷文をまわし、主文に山水文を描いた皿である。山水文には手前に松ではなく檜を入れ、家屋はだいぶ単純化されている。染付は全体に濃すぎて、絵の濃淡のない、平板的となっている。高台には砂が付き、目跡が目立つ。



32. 山水文皿  
 径31.5cm 器高4.5cm  
 器厚0.73cm

平縁の縁に雷文を廻し、主文に山水文を描いた皿で、裏面に簡略唐草文を入れている。染付がさらに濃くなり、線が少しぼけている。





33. 雲竜文皿  
 径28.9cm 器高4.5cm  
 器厚0.52cm

縁が少し立ち上がって段を有し、弱い輪花に二重帯状文を廻して、主文に雲竜文を描いた皿である。雲竜文の描き方は豪快であるが、少し粗く、竜の輪郭が不鮮明で、図柄が分かりにくくなっている。



34. 牡丹唐獅子文中皿  
 径22.4cm 器高2.9cm  
 器厚0.4cm

縁が少し反って、二重帯状文を施し、主文に牡丹唐獅子文を描いた中皿である。展示品中唯一上絵付のある皿であるが、わずかに牡丹の赤と、獅子の輪郭に金泥が残るのみである。絵付は丁寧で、全体にきれいな作である。





### 35. 草花兔文皿

径32.3cm 器高4.8cm 器厚0.63cm

縁が少し反る輪花に、二重帯状文を廻し、主文に草花に兔を描いた皿である。絵付の草花は秋海棠を少し単純化してあるが、全体に丁寧で、裏面にも薄い青身がかかり、全体の仕上げもきれいで、展示品中最もいい作である。

志田窯製品では、こうした身近な動物を題材にした図柄の作品も多い。





36. 松鷹文皿

径28.9cm 器高4.9cm 器厚0.55cm

縁が少し反る弱い輪花に、帯状文を廻し、主文に松にとまる鷹を描いた絵柄の皿である。絵付は丁寧で、乱れなく描いているが、線が少しぼけている。全体にきれいであるが、裏面で化粧土の塗りに少し斑があり、35よりは少し劣る。





37. 白富士松鶴文皿

径27.9cm 器高4.2cm

器厚0.4cm

縁が少し反る輪花に、带状文が廻り、主文に白富士、二本松、鶴を描いた皿である。富士の下にある二条線は、青黒いが霞を表している。富士、二本松、鶴を描いた図柄も志田窯に多い。高台に少し砂が付く。





38. 沢瀉鷺文皿

径31.1cm 器高4.8cm 器厚0.53cm

縁が大きく内湾し、型押し、篋当てによる輪花に、沢瀉に鷺を描いた皿である。絵付は濃淡を付けて、少しぼけるが丁寧に描かれ、裏面、高台もきれいに仕上げた良い作である。この図柄の皿も、志田窯では多い。





39. 葦蓮菊後見鷺文皿

径31.8cm 器高6.8cm 器厚0.65cm

平縁で、展示品中唯一高高台に櫛歯文を付けた皿である。主文は鷺を中心に、菊・蓮・葦などを描いていて、これだけ多くの画題を重ねているものはあまりない。裏面は忍冬唐草文であろうか。高高台に櫛歯文と言えば藩窯の鍋島様式であるが、これは絵付がそれほど丁寧ではなく、鍋島を真似て作ったものであろう。なお、高台の畳付に砂が付く。





40. 柳鷺文皿

径31.7cm 器高4.8cm 器厚0.53cm

平縁に雷文を廻し、主文に柳と鷺を描いた皿である。絵付は少しぼけ、図柄にも少し粗さがある。裏面には2段に唐草文を描いているが、圈線は1条である。高台には砂が少し付く。







#### 41. 葦鶉文皿

径28.5cm 器高4.2cm 器厚0.53cm

平縁で、主文に鶉と葦を描いた皿である。裏面には簡略唐草文を施している。中央の楕円形が鶉であるが、色が濃く少し簡略化されているため、鶉と見るのを難しくしている。裏底に引付きがあり、また、表面にも焼成時の汚れがある。





42. 松鶴文中皿

径21.6cm 器高2.6cm 器厚0.45cm

縁が少し反り、帯状文を廻し、主文に松と鶴を描いた中皿である。器体が少し歪み、絵付も少しぼける。

43. 三鶴文中皿

径22.3cm 器高7.2cm  
器厚0.48cm

朝顔状に開く器形の、少し深い皿である。輪花の縁に、濃淡を付けた広い帯状文を入れ、中央に翼を広げた三鶴を輪状に描いている。全体に貫入が入る。



44. 海老蔵重菱文中皿

径20.5cm 器高2.9cm  
器厚0.48cm

縁が少し反る輪花に、帯状文が廻り、主文に伊勢海老と重菱を描いた中皿である。これは歌舞伎役者の市川海老蔵が、ひいき筋に配るために作ったものと言われる。



45. 氷裂菊花文皿  
径27.1cm 器高3.9cm  
器厚0.53cm

縁が少し反り、型押しの輪花に、細い帯状文を廻し、氷裂文を地紋にして、菊花を描いた皿である。また、見込み部分にも型押しによる花形の陽刻があるのは、志田窯製品では珍しい。高台には少し砂が付く。





46. 樹木座敷文皿  
 径26.1cm 器高3.8cm 器厚0.51cm

縁が反って内向する輪花に、雲文状の帯状文が廻り、主文に座敷と中央に樹種不明の木を描いている。絵付は丁寧であるが、座敷の柱から木の枝が出ていて、上に雲のようなものが描かれる、意味不明な図柄である。





47. 牡丹文皿

径32.3cm 器高5.8cm 器厚0.56cm

縁が内湾する輪花に、主文は大きく牡丹が描かれた皿である。牡丹は濃淡をうまく使って表しているが、輪郭がぼやけている。裏面には簡略唐草文と圏線を入れている。全体に貫入が入っている。





48. 草花蝶文中皿

径20.5cm 器高2.8cm 器厚0.63cm

縁が内湾する輪花に、幅広の帯状文を廻し、主文に水仙と思われる草花に蝶を、燕と扇の枠内に山水図を描いた中皿である。帯状文は薄地に、濃く雲の様な文様を載せている。絵付は丁寧であるが、少しにじむ。高台に砂が少し付く。



49. 松羽根突文中皿

径21.2cm 器高2.6cm  
器厚0.45cm

型押し of 輪花に、  
細い帯状文を廻し、  
主文は羽子板と羽根、  
若松と熨斗を描いて  
いる。表面が少しざ



らつき、絵付けは  
少しぼける。



50. 秋海棠文中皿

径20.4cm 器高3.3cm 器厚0.53cm

平縁に雷文が廻り、主文に単純化した秋海棠文を描いている中皿である。

裏面には簡略唐草文を施している。絵付は丁寧で、仕上げもきれいである。





51. 寒山拾得文皿

径28.2cm 器高4.6cm

器厚0.55cm

型押し、篋当てによる輪花で、縁は内湾する。主文は竹林人物で、人物は二人で、うち一人が書を読んでいる図で、中国故事の寒山拾得を描いたものである。絵付は細い線で丁寧な描かれ、高台の仕上げもきれいである。



52. 寒山拾得文皿

径29.2cm 器高4.8cm

器厚0.43cm

縁が少し反り、二重帯状文が廻る皿で、主文は52と同じ竹林人物文である。しかし、こちらの方が絵付が雑で、人物の顔が乱れている。表面の釉に、あまり艶がない。





53. 日の出松下翁媪文皿  
 径28.9cm 器高4.7cm 器厚0.53cm

平縁に口紅を付けた皿で、主文に朝日と松を背に、掃除をする翁・媪を描いている。裏面には簡略唐草文と圈線を施している。絵付けは濃いめで、丁寧にすっきりと描かれている。高台に少し砂が付く。







54. 大根鼠文なます皿

径15.5cm 器高4.5cm

型押しで輪花にしたなます皿で、主文に大根と鼠を描いている。この図柄も志田窯製品に多く、本品のは細い線描きとダミで、簡略化して描いている。高台の内側は、径の三分の二ほど釉矧ぎして蛇の目にしている。全体にきれいな作である。



山水文なます皿5枚セット

5枚組のなます皿で、型押しの輪花に口紅を入れ、主文に橋渡し楼閣山水図を描いている。径が15cm前後で、同じ型で作ったものであろう。高台内側は蛇の目釉矧ぎである。



55. 山水文  
なます皿1  
径15.0cm  
器高4.5cm



56. 山水文なます皿2  
径14.8cm 器高4.5cm



57. 山水文なます皿3  
径14.5cm 器高4.3cm



58. 山水文なます皿4  
径15.1cm 器高4.5cm



59. 山水文なます皿5  
径14.9cm 器高4.5cm



山水文小皿7枚組

この小皿は7枚で組になるかは分からないが、ほぼ同じ大きさ、絵柄の小皿が7枚ある。轆轤整形後、返して高台を削り出し、立ち上がりへラ当てして輪花にし、縁を口紅にしている。絵柄は手描きで、少しずつ異なる。



60. 山水文  
小皿 1  
径9.9cm  
器高2.3cm



61. 山水文小皿 2  
径10.6cm 器高2.3cm



62. 山水文小皿 3  
径10.1cm 器高2.5cm



63. 山水文小皿 4  
径10.0cm 器高2.5cm



64. 山水文小皿 5  
径9.9cm 器高2.4cm



65. 山水文小皿 6  
径9.9cm 器高2.5cm



66. 山水文小皿 7  
径10.0cm 器高2.4cm

そのほかの小皿でも、輪花に口紅、主文に山水図が多いが、中には72の様に、4分割に水草と思われる変わった図柄もある。



67. 山水文小皿  
径10.4cm 器高2.5cm



68. 山水文小皿  
径10.1cm 器高2.4cm



69. 山水文小皿  
径9.8cm 器高2.4cm



70. 漁網芭蕉文小皿  
径10.5cm 器高2.2cm



71. 山水船出文  
小皿  
径8.5cm 器高2.0cm



72. 水草  
文小皿  
径10.2cm  
器高2.6cm

#### 参考文献

- 小木一良・横条均・青木克巳（1994）志田窯の染付け皿  
—江戸後・末期の作風をみる— 里文出版  
大橋康二（2009）年代別蕎麦猪口大事典 講談社  
野上建紀（2000）磁器の編年（色絵以外）1. 碗・小杯  
・皿・紅皿・紅猪口 九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会  
10周年記念 九州近世陶磁学会

#### 編集後記

日本では、1万年にも及ぶ焼き物の歴史がある。これは世界に冠たる、日本の誇るべきものの一つである。確かに今回紹介した染付磁器は、中国から伝わった技術である。しかし、この技術を短期間に吸収し、独自に発展させ、その発信元を凌ぐまでになったのは、日本の長い歴史の蓄積があったからこそである。日本にはまだまだ産地が分からない焼き物が多数ある。それはこうした焼き物の歴史の、奥深さから来ているものだろう。

ここに紹介した志田焼は、まだ産地が解明されてわずかしが経っていない。まだ、不明な部分は多々ある。これに出展品の解説をしたが、おそらく錯誤しているものもあると思う。この紹介によって、志田焼がより解明されることをのぞむ。

横芝光著 鶴民ギャラリー企画展図録

## 幻の青い皿

—江戸後期志田窯の染付皿展—

発行 平成27年6月6日  
編集 横芝光町教育委員会  
印刷 三陽メディア株式会社

